

及び氣象學上の種々なる疑團をも併せて氷解せしめんと欲したり。然るにこの前後三回に互れる踏査と發掘との結果に就きて見るに、予が當初の期待を悉く満足せしめたりとは云ふべからざるも、獲得せる資料に至りては必ずしも鮮少とはなすべからず。今此等の將齋品を區分すれば、佛典、經籍、史料、西域語文書、繪畫、彫塑、染織刺繡、古錢、印本、雜品の諸種となるべし。此等の出土品中第一回に屬するものは、多く和闐及び庫車の附近に於て之を獲しが、第二回第三回は吐魯番を中心として更に庫車其他の地方にも互れるものなり。試に其著しきもの二三を擧ぐれば、繪畫の斷片中にありては天寶十載、大歷六年の年號あるものあり。佛典に於ては西晋の元康六年書寫の跋ある諸佛要集經、西涼の建初七年の識語ある法華經を初めとして、善導大師の阿彌陀經跋語あり。建昌、延昌、延壽、龍朔等の年號ある寫經斷片も亦貴重なるものとす。經籍に於ては論語、史記、漢書等の斷片あり。史料としては晋の泰始五年木製招子、西域長史關内侯李柏書牘草稿、天寶五載牒狀、大歷九年牒狀、大歷十六年借錢文書、建中五年孔目司文書等を著しきものとす。爾餘の諸品は姑く之を措き、凡そ如上の年號と其他の諸條件とに依りて之を推すに、此等の出土品は何れも唐末を下らざるものと斷定すべきが如し。然るに近時歐米諸國の人士にして、中央亞細亞の探檢を試むるもの多く、英吉利のスタイン、佛蘭西のペリオ、獨逸のグリム、エーデル、同ルク、露西亞のオルデンブルヒ、同コツロフ諸氏の如きは、殊に世に知らる。此等の諸氏が本國に齎せし所を以て予の獲得に比すれば、其分量固より彼等に匹敵すべからず。而も其時代に於て六朝の古に遡り、其種類に於て頗る多様な點は學術的資料としての價值亦決して輕すべきに非ざるなり。

予は曩に此等の研究資料を擧げて京都帝國大學文科大學教授文學博士松本文三郎、同理學博士小川琢治、同文學博士桑原隲藏、同榊亮三郎、同狩野直喜、同内藤虎次郎、助教濱田耕作、羽田亨、講師藺田宗惠、富岡謙藏、東京帝國大學文科大學教授文學博士瀧精一の諸氏に託し、囑するに是れが學術的調査の事を以てせり。諸氏が調査の詳細なるものに至りては、別に之を公にするの日あるべしと雖、今茲には諸氏が調査の結果選定せるもの六百九十餘種を集めて之を複製し、西域考古圖譜と題して之を印行するに至れり。若し幸にして此書が學術上の參考たるを得ば、獨り予が本懷たるに止まらざるべし。乃ち本書編輯に關して上記諸氏の力に負ふ所甚だ大なり、附記して深く其勞苦を謝すと云爾。

大正四年三月

大谷光瑞識